

悩める家族にどう寄り添うか

ひのきしんスクール講座「家族への支援」から

自宅や自室に閉じこもり、学業や就労などの社会活動に参加できない「ひきこもり」が社会問題になって久しい。その背景には、精神障害や思春期におけるいじめなどの要因があると考えられ、それぞれのケースに応じた適切な支援が求められている。こうしたなか「ひのきしんスクール」(板倉知幸運営委員長)では、11月26日午後から27日

にかけて講座「家族への支援——ひきこもりのおたすけ」を開催。ひきこもりに悩む家族への支援のあり方を探ろうと、教内外の専門家による講義とパネルディスカッションを行った。ここでは、パネルディスカッションの内容と、農業を通じて就労支援などを行うNPO法人「アンダンテ農園」理事長の六十谷進氏の講演要旨を紹介する。

パネルディスカッションでは、飯降多鶴・ひのきしんスクール運営委員の司会のもと、六十谷氏、林久郎氏(洲北分教会長)、平野恭助氏(道竹分教会長)、新田恒夫氏(蘇我町分教会長)の4氏が「ひきこもりへの寄り添いとは」をテーマに討議した。

冒頭、悩みを抱える家族に接する際の心構えについて意見が交わされた。その中で、平野氏は「ひ

きこもっている本人はもとより、親自身も苦しんでいるケースが少なくない。支援する側は、親の話にもじっくりと耳を傾け、つらい気持ちを受けとめることが大事だと思う」と話した。これを受け、六十谷氏は「傾聴の次の段階として、当事者が前向きになる瞬間を見逃さずに、活動の受け皿を用意することが大切になる。周囲の社会的支援にも目を向けながら、将来、



パネルディスカッションでは、悩みを抱える家族への寄り添い方について活発な討議が繰り広げられた

(11月27日、おやさとかかた南右第2棟で)

専門の窓口も増えてきている。また、全国に100カ所ある『就労支援サポートステーション』では、相談員が家庭訪問をして適切に支援してくれるので、対象者に合った施設を利用してもらいたい」などと詳しく説明した。

この後、新田氏が、自身が代表を務めるNPO法人「スペース海」の活動について話した。

その中で、発達障害のある子供たちの個別指導をする際に、「ありがとう」の声をかけを実践していることを紹介。「なんらかの行動に対して『ありがとう』と声をかけることで、子供の自尊心は高められると思う。子供たちの小さな変化を見逃さず、喜びを見つめる。そうした積み重ねが、子育ての大きな喜びとなるのではないかと述べた。

農作業などを通して、ひきこもりに悩む若者を支援しようと、昨年4月に「アンダンテ農園」を設立した。

アンダンテとは、「歩くような速さで」という意味の音楽用語。それぞれのペースで作業に取り組み中で、労働の喜びを感じたり、人とのつながりを感じたりしてもらいたいという思いが込められている。

20年ほど前、公立中学校で教員をしていたころ、生徒の不登



校が問題になった。当時は、不登校の問題について、学校側の対応は遅れがちだった。

そうした中で、不登校に関する指導者の勉強会に参加したところ、講師から「子供たちは不登校を望んでいるわけではない」とい

ていることだった。こうした生徒たちと向き合う中で、心身を正常な状態に戻していくことが大事だと考えるようになった。

その後、小学校へ転勤した私は、障害児学級を担当することになった。

ひきこもりがちだったある若者が、私どもの農園に通う中で本来の明るさを取り戻し、積極的に作業に取り組むようになったのだ。いま彼は、教育関係の会社でアルバイトをしている。そうした若者の姿を通じて、人は労働することで自分の能力を開花させ、発展させていくことを実感した。若者の再出発には、彼らに労働の喜びを味わわせることが大切なのだ。

私どもの農園に来る若者の中には、人間関係の構築が苦手な者が少なくない。それでも農業を好きになってくれれば、農業を通してつながりを持つことができる。

い」といった内容の話を聞いてハッとしました。

早速、学校の態勢を整えようと、不登校の生徒をフォローする「教育相談室」を設置した。日々相談を受ける中で気づいたことは、不登校になる生徒の多くが、精神的なストレスを抱え

同じころ、近所のお年寄りから畑の耕作を手伝ってほしいと頼まれた。そのとき、ひきこもりや障害のある子供たちと一緒に畑仕事をしてみようと思いついた。

活動を始めて間もなく、思わぬ「効果」が表れた。

彼らの「未来を耕すために、「農業が好き」という若者を、焦らずに育てていきたい。

講演要旨

農業で「若者の未来」を耕す

六十谷進 NPO法人「アンダンテ農園」理事長